

コロナ終息とこれからの私

岐阜市立東長良中学校 3年
寺澤 咲帆(てらざわ さほ)

今年、5月8日のコロナ五類への移行を迎え、国内でもコロナが終息しつつあります。コロナが流行し始めてからおよそ3年、私の周りで起こったことについて話したいと思います。

みなさんは、コロナ禍において、医療従事者に対し、どのような考えをもっていましたか。

応援。励まし。心配。距離感。関わりを減らす。

もし、目の前に医療従事者がいたら、どのような対応をすればよいのか、少しの迷いは出ていたのではないのでしょうか。

私の両親は、医療従事者です。コロナの3年間で医療従事者やその家族は少なからず苦しみを感じたことと思います。私もその一人です。両親がコロナに感染した時には、どのような対応をしたらよいのか、家族で何度も話し合いました。また、感染対策を徹底した生活を送ることになりました。食事の場所や時間を別々にしたり、過ごす部屋をわけたりして、一緒に生活しているのに距離を感じる事が多くありました。

テレビやインターネットで、医療従事者やその家族に対する、公共施設の利用拒否、子どもの預かり拒否・暴言などの差別や偏見があることを目にするようになりました。

実際のところ、身内でさえも、私たちがマスクをしているのにも関わらず、過度にソーシャルディスタンスをとって会話するようになりました。気持ちのやり場がなくて途方に暮れてしまったことが今でも思い出されます。母も周囲の目に気を使うようになり、私たちにも生活に気をつけるように、と話をされました。

コロナが続けば続くほど、ある考えが私の心を蝕んでいきました。それは、「どうして私だけ…。」社会の医療従事者に対する対応も分からなくもない。親が気にかけてくれる優しさも伝わってくる。でも、どうしても心に迷い、葛藤、苦しみなど、整理できない感情があふれてぐちゃぐちゃになっていました。

気持ちのはけ口は家族、親。家族を苦しめる言動をとってしまったこともありました。物に当たる自分、心ない言葉で親を傷つける自分、そんな自分を責める時もありました。このような状況の中でも、両親は私たちの生活を支えるため、待っている患者さんのために、毎日家族にも感染させてしまうかもしれないというリスクを抱えながら、仕事に行きました。

緊張感のある生活からの解放、周囲の人からの応援や励ましの声、どんな状況でも仕事に行き続けてた両親の後ろ姿、人の弱さ、そして強さ、この両方を身を以て感じた3年間でした。

これから私は、2つのことを大切にします。

1つ目は家族です。どのような状況でも私たち姉妹のために働き続けた両親。苦しい時に力を合わせて乗り越えた妹。寺澤家の絆を一生大切にします。

2つ目は、自分の将来です。今まで曖昧に考えていた将来ですが、この3年間で真剣に考えるようになりました。お父さん、お母さんのように誰かのために力を尽くせる人になりたい。混乱した社会でも、間違った情報に流されず自分自身で正しく判断できる人になりたい。

苦しい3年間でしたが、だからこそ人の弱さや強さ、そして大切にしたいものに気づけました。予測不能な困難な時代でも私は強く生きていきます。